

# 火星

平成二十六年六月号



七曜抄

(八)

山尾玉藻

壬生寺の法被に蝶のつきゆきし

狂言の屋根をまろびし雀の子

風に照り風に陰れる壬生念佛

とどまれば此処も水鳴る濃山吹

いづかたを龍馬馳せたる青嵐

昼酒の貌見て反す雨つばめ

寺田屋に女ごゑする走り梅雨

フライパンにバター煙らす入梅かな

梅雨に入るすでに久しく降るやうに

黒谷の奥は雨てふ小暑かな

# 太白星

水の辺にみな寄つといでふきのたう  
うぐひすの啼きをり雨の止んでをり  
河馬の子の浮いてさくらの三分咲き  
養老山より流れ来る春の水  
春雨にぬれて色濃き埴輪たち  
鍬の柄に握りぐせあり山ざくら  
青空を大きくゆらし芽吹の樹

杉浦典子

浜口高子

貝の紐きざんでをれば雨となる  
雁帰るむらさき深き着物吊り  
清明や籠屋は蔓を均しゐる  
昼の月野焼の煙の紗に浮み  
たんぽぽや野焼の火の粉とんで来し  
常夜燈の真白き障子大石忌  
おぼろ夜やナイフフォークの音に更け

# 火星作品

## 山尾玉藻選

種まきし土月光に預けけり  
大和郡山城 孝子

万蕾の風分けてゆく遍路杖

さへづりを来てさへづりの閻魔堂

飛火野のけぶれるところ孕鹿

乗つて来し遠足のみな同じ顔  
八幡 大山文子

唇のゆたかに嘆く涅槃絵図

病む犬を置く春暁の草の上

耕を余しし父の釣り支度

茎立や新月の闇やはらかし

アネモネの散りかけてゐる彼の部屋

野遊のちよつと見ぬ間の背丈かな  
宝塚 山田美恵子

ゴムの木の間ふ天井春の雷

紅梅を渡る翼の幼かり

雛菓子のきれいを飾るそんな齡  
潮騒の上りくる崖落し角  
桃の日の座布団に雨見てをりぬ  
啓蟄や枝焚けば空よどみきし  
灯ともせば柱かげりぬ椿餅  
卵溶く音させてをり春休  
海に来て家わすれぬる鳥ぐもり  
古雛の通へる氣息納めけり  
遙かなる木つ端を焼べし雁供養  
野遊の野に隠れ水忘れ水  
伊勢まぬり山々出でし水勢ふ  
神燈の灯るころなり薬ゆる  
遅れたつ一羽は海へ彼岸西風  
鳥帰る色絵硝子のくるわ窓  
蝶生まれ黒土の畝きはだてり  
鳥かごの水かかへてぬる春休  
井戸蓋のしゆるづな光る端午かな

宝塚蘭定かず子

神戸深澤 鱻

八幡坂口夫佐子

# 選のあとに

山尾 玉藻

種まきし土月光に預けけり 城 孝子

種播きを終わると一事を成し終えた安堵とは別に、果たしてうまく発芽するだろうかという一抹の不安を抱くものである。昼間種播きをした辺りが月明を浴びるのを眺めつつ、作者はその懸念を意識して拭っているようだ。「月光に預けけり」とはなかなか詩的な表現である。

唇のゆたかに嘆く涅槃絵図 大山 文子

涅槃図には多くの人々や生き物が悲嘆にくれる様子が描かれている。大泣きする口、悔しさに一文字に結ばれた口、悲嘆にだらしなく開く口など、口元から悲しみのとりどりが伝わってくる。「唇のゆたかに嘆く」とは嘆きのほどを色々の口元に語らせたもの。この視点は清新にして独自性がある。

野遊のちよつと見ぬ間の背丈かな 山田美恵子

子供の成長の速さには驚くばかりである。野原で伸び伸びと走り回る子供を眺めながら、作者は殊更にその感を強くしているようだ。ちよつと感慨にふける作者に向かつて、長い手足を輝かせながら子供が嬉々と駆けて来る。

灯ともせば柱かげりぬ椿餅 蘭定かず子

思わぬ日の陰りに昼の灯を点した作者は、座敷の柱が逆に

陰影を濃くしたように感じた。定まりにくい春の微妙な季節感を捉えて静かな説得力がある。掌に伝わる「椿餅」の葉の冷やかさも過不足なく働いている。

伊勢まぬり山々出でし水勢ふ 深澤 鱧

伊勢参は行楽も兼ねている所為かこころ弾むもの。この頃は万物に生命の息吹きや喜びの気力が濔る。その活気ある季節感を残雪の山々から躍りてた川の勢いに集約した。

遅れたつ一羽は海へ彼岸西風 坂口夫佐子

何気なく目にした景ではあるが、一羽だけが海へ発つていったことがいつまでも気掛かりとなっている作者なのだろう。彼岸の頃らしい感応である。

和草の一本垂るる雀の巢 西村 節子

和草、生え始めたばかりの柔らかい小草のこと。そんな草が一本垂れているのは、何でもない雀の巢にこそ相応しい。

青空を巻きこんでゆく雪解川 松山 直美

急に水高を増した雪解川の流れは激しい。川下を眺めていた作者は、川がもんどり打ちつつ先々の青空を引き摺り込んで行くように感じたのだ。「青空を巻きこんでゆく」の写実は、雪解川の並々ならぬエネルギーを言い得て見事。(以下略)

同人一

# 恒星圈

野澤あき

盆梅展いろは匂へと淡海かな  
木蓮の一花一花に空の青  
紅梅の雫のやうな雨あがる  
乗りついで付いてきたりし春の月  
春光や練習船の出港す

田中文治

波田美智子

水の面に影す銀杏の芽吹かな  
山鳩の声に種粃浸しけり  
佐保姫へ一日切符買ひにけり  
ふたもとの水捻り合へる春の川  
古雛屈伸運動してみやう

飛ぶ鳥の影をひきたる春障子  
春寒くお水取の日聞いてをり  
春の雨一日灯してミシン踏む  
悪声の鴉過りし紫木蓮  
沈丁花葬の出入りに香りけり

戸田春月

深澤鱻

春を呼ぶ更紗の卓布洗ひ上げ  
春愁の肘をのせぬる膝がしら  
辛夷見て伎芸天見てけふ足りし  
春風や手話のふたりの生き生きと  
外郎はむかし葉や春灯

竹送るきさらぎの田の賑々し  
お水取干菓子型のつかひ染み  
民の釜須磨も明石も釘煮炊く  
島あれば裏に島あり人丸忌  
北野をどり蝶の豆皿いただきぬ

# 獅子座

山尾玉藻推薦

西村節子

陪塚を噛む榎の根臈なる  
耕人の一瞥受けし嵯峨詣  
チエロケースの歩いてゆくよ春の昼  
億年の後を語れば亀鳴けり

緒方佳子

春の鴨岸をまあるく泳ぎけり  
雨水かな納戸の奥の灯りぬし  
峰峰をむらさきに山笑ひけり  
雛さまと同じ夕餉を頂きぬ

涼野海音

ピーナッツ噛み陽炎に入りゆけり  
筆立に筆のなかりしおぼろかな  
大阪の海の暗さに黄砂降る  
ぶらんこを漕ぐ正面に男山

藤田素子

嘯やトートバッグの大き口  
帰る鳥見送つてゐるベッドかな  
嘯に寝違への首たてゐたり  
亀鳴くや薔薇の香りのトイレ紙

前田忍

下萌や逆立ちの足空へ伸び  
虎杖の籠を傍へに足湯かな  
野焼の火芒の株に残りをり  
鶯やもう石切らぬ石切場

助口もも

百千鳥天王山をゆるがせる  
荃立の渡船場にいま大落暉  
白梅の風に墨絵のみどりめく  
啓蟄やこの道ゆけば大仏殿

藤本千鶴子

豆腐屋に田楽にほふ夕べかな  
つづけざま落ちし椿の嵩なりし  
まんさくのりりヤンの紐のぼしたる  
まづ荷台掃きて花苗のせにけり